

## 田園俳人松本椿年の生涯と作品（二）

——生涯発達心理学の観点から略年譜の試作——

宮 川 充 司\*

過酷なシベリヤ抑留から生還し、昭和のカリスマ俳人として知られる俳人原田喬（一九一三～一九九九）が創刊主宰した、俳句誌『権』の百号記念号（昭和五十八年十二月号）の「特集 青北風集作家作品」に、次のような句が掲載されている。

石 句 う

松本椿年

すかんぼの実のさわさわと夏に入る  
うすうすと巣どりしお蚕や明易し  
水草の秋立つ白根流し合う  
北風や石工が叩く石句う  
風花や研ぎすましたるノミの先  
風や三日月ふわと飛びそうな  
秋涼し古竹新竹打ち合える  
なだらかに流れ継ぐ河去年今年  
泉より淑気引いて雉子翔つ

初明り波の穂さきを走りけり

（注）作者は九十六歳です（編集部）

（『権 百号記念号』七九頁）

編集部作者についての注記がなければ、さっと素通りしてしまいうような現代俳句十句である。句題の「石句う」は十句の句題というより、第四句の題であるが、その句が北風の中、石工が句碑を刻む光景を読んだものと理解すると、この俳句誌の百号記念号を祝うという趣旨から、その句を自選し句題とした意図が推定できる。第五句も、第四句と同じ時期に作られたものと推定しているが、正確な制作時期を示す直接的な資料を見つけていない。これらの十句は、季語も四季にわたり、また第七句以外は、作者松本椿年が、前年に出版した『第二句集 限界』に収録されている句の再掲である。また、第一句と第十句は、主宰の原田喬の父親である俳人原田濱人（ひんじん）（一八八四～一九七二）が昭和七年（一九三二）に創刊し、原

田喬が選者でもあった俳句誌『みづうみ』に掲載された句であり、第一句は第三九二号（昭和四十七年九月号二二三頁）、第十句は第三九八号（昭和四十八年三月号四〇頁）に掲載された句である。ちなみに、第一句の最初の掲載誌『みづうみ第三九二号』の発刊前月に原田濱人が逝去し、この号の巻末に訃報が掲載されているので、その記憶と原田喬氏への配慮から第一句として配置した可能性が高い。第七句のみは『第二句集 限界』に掲載されていないので、この特集のために作った新作の句と考えられる。いずれにせよ、九十六歳現役で俳句雑誌に投稿というのは、「百歳以上六万人」（朝日新聞二〇一五年九月十一日朝刊記事）という現代においても、余人にはできにくいことである。

### グランマ・モーゼスに比して遜色のない 松本椿年の生涯

俳人松本椿年について、筆者はかつて、生涯発達心理学における生涯発達概念と個人発達概念について解説した著書で取りあげたことがある（宮川、二〇〇〇）。アメリカの国民的女流画家グランマ・モーゼス Grandma Moses (Anna Mary Robertson Moses: 1860-1961) の生涯に触れた後、共通した生涯発達特性をもつ日本人の一人として取りあげたものであった。

グランマ・モーゼスは、モーゼスばあちゃんという意味の愛称である。この女性は、アメリカの貧しい農民の生まれで、小学校を卒業すると十二歳で農場労働者として働きに出され、そこで出会った男性と結婚し、やがて夫婦で農場をもち、十人の子どもを産み育てた。夫と死別、家庭と農場の第一線を退いた、七十五歳頃から素人

画家として絵を描き始めた。それまでは、農場と家事でひたすら働くのみの勤勉な人生であった。専門的な美術教育を受けたことのない、この老婦人は独学で、ひたすら日常的な田舎の田園風景を描いた。その作品が絵画コレクターの目に留まり、八十歳でニューヨークの有名画廊で初個展、一躍時の人となった。その後も、百一歳で亡くなるまで絵筆を離さず、約一千六百点の絵画作品を残した（秦、一九九五）。

松本椿年（明治二十年〜昭和六十一年（一八八七〜一九八六）は、グランマ・モーゼスから十七年、後にずらした形で、十九世紀から二十世紀にかけての約百年間を生きた俳人である。また、グランマ・モーゼスと同じように、人生の四分の一は兼業農家として工場に勤め、そこを退職した後、農作業に専念する傍ら俳句を作り、昭和四十五年（一九七〇）八十二歳の時に、『句集 老雅』を初出版。昭和五十七年（一九八二）九十四歳で『第二句集 限界』を出版。なおも句作を続け、昭和六十一年（一九八六）二月八日、九十八歳（数え歳行年百歳）で、「春風に乗ってゆかはや句の行脚」という句を残し、その生涯を静かに閉じた田園俳人である。この句は、亡くなる数日前、ほとんど昏睡状態の時に、何か小声でつぶやいているのを看護をしていた家族が聞き取り書き留めたものである。この句は、表面的に読むと「もう一度春風に乗って俳句の旅に出てみたい」という意味であるが、「句の行脚」に「苦の行脚」つまり冥途への旅、また「ゆく」には「逝く」の意味が隠されているとすると、「まもなく余命が尽きようとしているが、まだ春浅い。せめて死出の旅路は、春風に乗って俳句を詠みながら行きたいものだ」という意味になつてしまう。正確には、この句は俳人本人が短冊や句箋にしたための絶筆の句ではない。俳人本人が書き留めず、

生死を彷徨う昏睡状態の時につぶやいたものを家族が書き留めたので、厳密には絶筆ではなく絶吟の句という表記が正確だろう。この句の用字は、遺族が縁故の俳人の意見を聞いて、「句の行脚」としたものである。なかなか凡人には、こうした境地に至れるものではない。

老年期は、衰えていく心身の機能、あるいは心身の障害、やがて訪れる死といった「喪失」という言葉で表現される非可逆的な変化があり、誰しも積極的に歓迎できる状態に向かつての変化とはいえない。しかし、この老俳人が最期に達した境地は、老年期における心理的变化が単純に「人間として価値的により低い状態に向かつての変化」ばかりではなく、より精神的に高い水準に向かつての変化を含みうるといふ、超高齢期（八十五歳以上）の老人に時に認められる例といえやほり希なケースといえるのではないだろうか。ただし、老年期は脳や他の身体疾患、認知症といった多様な障害を伴うのも一般的なことであり、心身ともに健康で幸福の内に人生の終焉を迎えるということは誰しも人生に保障されていることではない。現代でこそ、超高齢期を生きる老人というのは、それ程特別なことではなくなってきたが、前世紀の中頃まではやはり特別なことであつた。現代においても、健康で長生き、しかも死の間際までずっと現役というのはやはり特異なケースといえるのかもしれない。

超高齢期の在り方という側面にも一つの関心があるが、もう一つはこうした境地に至るまでのこの老俳人の個人史というのがどのようなものであつたか。また、ほぼ一世紀にわたる長い人生は、そう幸せなことばかりではない。特に十九世紀から二十世紀にかけてというこの老俳人が生きていた時代は、世界と日本社会は激動の時代

であつた。この老俳人は亡くなってからほぼ三十年の歳月を経ているので、かなりの資料が失われ、残されている資料から、あるいはすでに永遠に失われている部分もあると考えられる。それを、残されている資料、あるいは現存の家族の証言等から、どれだけ客観的な人生の出来事が推定再現できるかということが、この研究の試みである。

ここで、誤解のないように一つ筆者の立場を明らかにしておく。また、地方の俳人として、すでに歴史の流れの中で忘れ去られ埋もれてしまったといつてもよい俳人になぜ、俳句の研究者ではない発達心理学・教育心理学領域の研究者が関心を持つのか。既に故人となつているこの老俳人は、筆者にとつては母方の祖父にあたる。子どもの頃、筆者にとつては俳句と相撲が好きな人柄の温かい素朴なお爺さんであつた。その祖父が亡くなり、その葬儀の日に、上述の絶吟の句が披露された。また、その句に対して縁故の俳人達が、追悼の句を披露していった。さながらその葬儀は追悼句会の様相を呈した、大変印象深い葬儀であつた。大変恥ずかしい話だが、その時初めて知つたのは、その祖父は俳句が趣味で人柄のよい田舎の老人というだけではなく、俳句という特殊な分野で、ある種の達人の闕に達した一人と考えた方がよいことであつた。個人的なことがらであるが、その祖父と筆者をつないだ母も、三年前に他界している。

#### 俳人松本椿年の年譜と句集、松本二家への訪問調査

それではなぜこの俳人松本椿年をとりあげるかというと、一般的に芸術家の一生は、人生の様々な時期に作られた作品が、その生涯

の軌跡を捉えるために里程標になることが珍しくない。勿論、作品・作風にもよりけりであるが、俳句の多くは、その時々々の俳人の周辺に起こった出来事やその時の心情を記録として残すことができるものである。また、周辺資料と照合して制作年代や、また季語があるのでその作品の作られた季節を特定することができる。あるいは、逆にその俳句の作られた時期から、生涯発達重要な出来事を推定するということも可能ではないだろうか。特にこの松本椿年の俳風は、田畑での農作業の傍ら、その時々々の生活体験から生まれた素朴な感動や心情を率直に表現した句が少なくない。また、ごく一部であるがその句を作った時の詞書きといった手がかりを伴っている句があり、その出来事によりその句の作られた時期を推定することが可能な場合がある。こうした試みが、成功するか否かは、今後の資料分析の結果で判断していただきたい。

この俳人には、二つの公刊された句集がある。一冊は昭和四十五年（一九七〇）四月、八十二歳で処女出版した『句集 老雅』であり、もう一冊は昭和五十七年（一九八二）四月、九十四歳の時に出版した『第二句集 限界』である。句集の出版という点については晩成の俳人である。とりわけ、『句集 老雅』は十歳の頃から句作を始めて、その出版までの約七十年間に渡る人生の節々のことが織り込まれているといわれる。二冊の句集それぞれのあとがきに、俳句との出会いや投句（投稿）した俳句雑誌の名称等が記述されているが、いわゆる年譜が作られていない。俳句の場合に限らないが、年譜は形式的に俳人の俳句歴を示すというだけではなく、その俳人とその作品の作られた背景や人柄・生活経験等の理解を深めるための手がかりとなる基本的な枠組み資料である。また、筆者の専門分野の一つ、生涯発達心理学における研究上の知識や経験からは、特

定の個人について残された生涯発達に関する資料からその人の個人史を推定し組み立てる作業は、事例研究においては通常の事柄でありそう特別なことではない。こういう着想から、松本椿年の年譜を作成する試みを行おうとしているので、生涯発達視点からのこの俳人の個人史を分析再構成する作業となるので、筆者の作成しようとする年譜は、純粹な俳句の修行歴や作品歴のみから構成される年譜とはならない可能性があることをあらかじめお断りしておく。

松本椿年の年譜を作成していくために、まず取り組むべきことは、現存の遺品を含む資料の調査収集である。また、生前の椿年を知る人への聞き取り調査、それから生前投句（投稿）を行ったとされる俳句雑誌、生前交流のあった俳人たちの著作物である。このために、まず二〇一四年七月十三日と二〇一五年八月二十六日の二回に亘り、椿年が本家からの分家により興した静岡県駿東郡小山町にある松本家、すぐ近くに所在する生家（松本本家と記する）に訪問調査を行った。椿年の生家松本本家を継いだ椿年の末娘（筆者にとつては叔母）で、椿年の『第二句集 限界』を椿年の側にあって、既に故人の御主人（筆者にとつては叔父で、椿年にとつては娘婿）と共に、椿年の『第二句集 限界』の編集作業を行った人でもある。すでに米寿の祝いを過ぎた年齢になっているが、椿年の晩年がそうであったように、心身共に至って健康で、高齢者を悩ませる認知症の主症状もみられず、記憶も非常に鮮明である。この人の記憶が、年譜を構成する出来事の特定に重要な手がかりが得られるものと推定した。また、年譜を作成するために、両家の様々な出来事や椿年の生涯における大きな出来事に関係した資料として、どのようなものが残されているかが、今後の研究の方向性を決めることになる。こんな観点から、全く試行錯誤的に、最初の二〇一四年七月

十三日に訪問調査を行った。

その折、椿年の末娘との面接調査中、思いもかけない重要な資料が、椿年の生家松本本家に保存されていることがわかった。それは、天保十二年（一八四一）生まれの椿年の父松本勘太郎と弘化三年（一八四六）生まれの母きくの代から、大正六年（一九一七）九月の勘太郎の隠居、安政五年（一八五八）生まれの義兄松本紋次郎の家督相続、三男の傳次郎（椿年の本名）の分家までの松本本家の戸籍事項が記載された戸籍謄本である。椿年にかかわることとして、その兄弟姉妹構成、山崎すみとの婚姻、椿年の第一子（長女）と第二子（次女）の誕生までを含む戸籍事項が記載されている。年譜を作成するためにはもともと基礎的な第一級資料である。明治から大正初期に掛けての大家族の戸籍事項であるので、そこに記載されている三世代に亘る家族構成はかなり複雑であり、そのままでは理解が困難であったので、椿年の末娘に説明を受け、記録した。また、付帯情報として、この家の明治期から戦前までの故人のお位牌を拝見し、没年を記録した。また、第二次世界大戦以前の日中戦争で戦死した、椿年の甥が入隊する折に椿年が書いた上官への挨拶状の下書きが保管されていたので、それを閲覧し写真資料として記録した。

次に、松本椿年が大正六年の分家により興した松本家の資料について記述する。二〇一四年七月の第一回の調査の折、同家に保存されていた椿年の遺品の一部を調査させていただいた。現在は椿年の孫世代になるが、大変幸運なことに椿年の遺品は基本的にそのままの状態で保存されていた。たとえば、晩年椿年が手元に置いてあった俳句雑誌、生前親交のあった俳人の句集、手書きの句会綴りといったものであった。

俳句雑誌は、浜田濱人が創刊した『みづうみ』第二五六号（昭和三十六年五月号）～第五二六号（昭和五十八年十一月号）、壁俳句会萩原麦草の『壁』第十二巻第一号（昭和三十九年一月号）、小笠原龍人の『塔』第十一巻第十一号（昭和四十四年十一月号）、第二十五巻第九号（昭和五十八年九月号）、原田喬の『椎』第九三号（昭和五十八年五月号）・第一〇〇号（昭和五十八年十二月号）、渡邊水巴が<sup>すい</sup>大正五年（一九一六）に創刊し渡辺桂子に引き継がれていた『曲水』第六八〇号（昭和五十年七月号）のみであった。

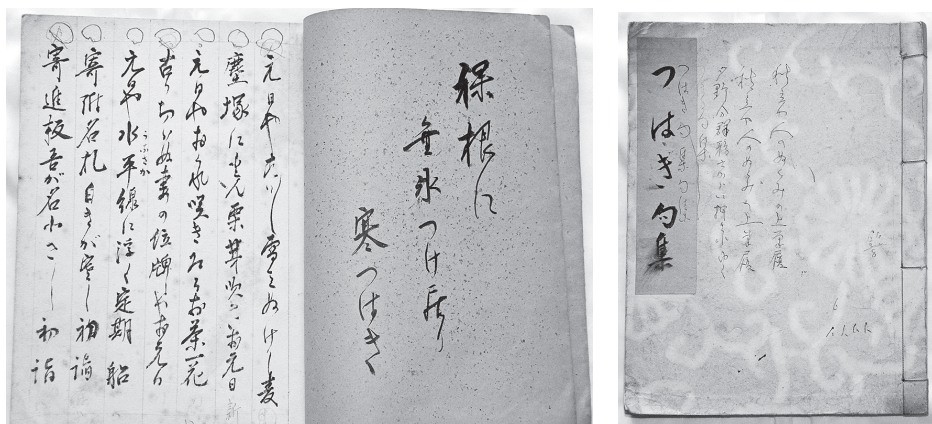
『曲水』第六八〇号には、椿年の句は掲載されていないが、親交のあった石田<sup>ふし</sup>仏子の句が掲載されているので、仏子からその号を贈られたのではないかと推定するのが自然であろう。

『句集 老雅』のあとがきに「昭和十三年から約二十年間句作はしていても各誌に投句はせず、記録もせず、雑誌は人に呉れたり失くしたりで手元になく」と書かれているように、富士紡績俳句部で椿年が中心となって立ち上げた『簞』、加納野梅創刊の『鬼栗毛』、渡辺水巴創刊『曲水』、古見<sup>ずん</sup>豆人創刊『大富士』は上述の『曲水』第六八〇号を除いて、一冊も所蔵されていなかった。

交流のあった俳人の句集として、加納野梅（昭和三年～一九二八）の『野梅句集』、雨宮虹月（昭和十二年～一九三七）の『句集 みなわ』、原田濱人（昭和三十八年～一九六三）の『定本原田濱人句集』、前田<sup>かくじん</sup>岳人（昭和四十年～一九六五）の『自選 岳人句集』、金子敏女（昭和四十九年～一九七四）の『句集 波の音』、石田仏子（昭和五十七年～一九八二）の『仏子句集 花筏』、といった書籍が残されていた。

それ以外に椿年自選手書きの『つはぎ句集』、手書きの句会集『富望ぬし追悼句集』といった句会の綴りが少なくとも七冊残され





図一 つはき句集 表紙及び初頁

ていた。これらの手書き句集は、二〇一五年八月の第二回調査の折に発見し、原本を借り出すこととなった。二百八十句を含む『つはき句集』は、『句集 老雅』の主な母体となっているものではないかと考えられる手書き和綴本である(図一)。この句集については、後の分析報告とせざるをえないが、ざっと通覧したところ、『句集 老雅』にはほとんど採録されていない十歳代の頃のものとは推定できる初期俳句作品が含まれている外、妻すみと死別した昭和三十年(一九五五)代初頭頃までの句までで占められているように推定できる。一頁四句目に『句集 老雅』四頁にも掲載されている次の句が書かれているが、これは妻すみと亡くなった翌年の昭和三十一年元旦の句と推定してゐる。妻すみの亡くなったのは、昭和三十年五月のこと、これは松本家に祀られているお位牌からも確認している。

#### 古り切らぬ妻の位牌やお元日

それにしても、それぞれの句が作られた時期を推定するのに、直接的な資料があまりにも乏しい。少なくとも、自筆本『つはき句集』、椿年句集という意味の『椿句集』という名称を付けたものと推定できるが、出版を想定していたものかどうかは不明である。ただ後に、昭和四十五年(一九七〇)に『句集 老雅』を出版する折、この『つはき句集』を母体に、その後『みづうみ』に投句した句を追加して発刊したのが『句集 老雅』ではないかと推定できるのではないだろうか。

## 俳句雑誌に掲載された椿年の句

さて、明治・大正以降の俳人の俳歴を表示する時に、俳句の宗匠への師事歴とともに、俳句誌における投句（掲載）歴というのは、その俳人を評価する時に重要な側面である。松本椿年の場合、師事歴は、『第二句集 限界』あとがきに「私の家は俳句一家で、義兄が竹因、長兄が花月、次兄が一啓、父が吉野庵禾<sup>かきぞう</sup>裕と号し、田舎宗匠で晩年は吉野庵の庵号を時の成美（尋常高等小学校）の校長永田半翁先生に譲り、鉄斎と名のつていた」と記されているように、椿年に最初に俳句を教えたのは父親の松本禾裕（本名勘太郎）である。俳号も父親が与えたものであった。長じて、昭和四年（一九二九）に母校の駿東郡小山町立成美尋常高等小学校長として着任した、渡邊水巴主宰の『曲水』同人古見一夫（俳号豆人）が大きな影響を与えた俳人であるが、それ以外は特定の師事関係はないと推定している。様々な句会に参加、あるいは様々な俳句誌に投句をしながら、さまざまな俳人の指導を仰いでいったと推定している。俳句誌の経歴は『句集 老雅』のあとがきに書かれているように、「父の没後勤めていた富士紡績小山工場の中で俳句部を創り、『簞』という小誌を作り、主幹なしで時々選者を替えて、斯道の伸展を図った。たまたま東京から加納野梅門下で新鋭の近所に帰住した坂本緑村の勧めで、加納野梅主宰の『鬼栗毛』誌に投句指導を受けていた」ということである。その後、古見豆人を迎えて「あゆみ句会」を興し、渡邊水巴主宰の『曲水』の作家が参加し、『あゆみ』を『大富士』と改題した。以来『曲水』『大富士』『みづうみ』『塔』に據った」という。これらの投句歴を確認するために、椿年

の初期作品の掲載誌の確認が必要である。椿年の遺品として残っている『みづうみ』を除いて、特に多くの投句をしたと考えられる富士紡績小山工場俳句部の『簞』、昭和四年に古見豆人を主宰者としたあゆみ句会の昭和四年と五年の二年分を書籍としてまとめたと推定できる『あゆみ句帖』（大富士吟社）は、図書館の蔵書検索サイトや「日本の古本屋」の検索サイトを使用しても探し出すことはできなかった。恐らくこれらはどなたか個人で所蔵している人がいるかどうかの所蔵状況ではないかと考えられる。

次に、『鬼栗毛』『曲水』『大富士』の所蔵館を検索し、椿年の投句の掲載状況を確認することとした。加納野梅主宰の『鬼栗毛』については、複数の書籍情報検索サイトで検索したが、所蔵館を探し当てることができなかった。しかし、その検索過程で、椿年本人が触れていない俳句雑誌、加納野梅が昭和四年一月に創刊した俳句雑誌に『新草』という俳句雑誌があったことを示す資料を探し当てた。おそらく今は幻の俳句誌といってもよい『鬼栗毛』は昭和三年までの刊行で、昭和四年一月から少なくとも数年間は『新草』という雑誌となったと考えることもできるが、現存しているのは『新草』の昭和四年一月発行の創刊号から昭和七年八月号までの掲載句を再選」と凡例に記載されている『新草俳句集』（昭和七年十二月発行）の句集一冊のみである。これは、「著者寄贈本」として国立国会図書館に所蔵されており、現在は国立国会図書館デジタルライブラリーのデータベースとして、閲覧可能となっている。偶然に探し当てた『新草俳句集』には、椿年の句が三十三句掲載されているが、大半が未知の句で、それでもうち二句が椿年の自選句集『句集 老雅』に再掲されている。また、『新草俳句集』には、加納野梅門下で東京から帰村した同郷の俳人坂本緑村の句も多数収録されてい

る。椿年がその自選句集のあとがきに記述しているように、野梅の俳句誌への投句を椿年に薦めたのは、その緑村であることが十分理解できる。なお、その野梅が昭和三年十一月に発刊した『野梅句集』が現存しているが、その中に野梅が椿年の生家とも近い緑村の生家に泊まったことがあることを示す詞書きの二句が残されている。その折直接野梅に教えを請うこともあっただろうと考えるのが自然である。『鬼栗毛』を閲覧することができないので、依然として昭和三年以前の椿年の俳誌掲載句を確認することが困難である。

次に、大正六年にホトトギス派の俳人渡邊水巴が創刊した俳句月刊誌『曲水』は、日本近代文学館が第一巻第六號からかなりの巻号を体系的に所蔵している。無論、戦前分については、欠巻があるものの、もっとも体系的に所蔵されている。欠巻のごく一部については、国立国会図書館がデジタルコレクションのデータベースとして閲覧に供している巻号で補完できる巻号もある。日本の古本屋サイトで検索したところ、戦前発行分で欠巻になっている巻号の一部について入手補完することができたものもある。また、『曲水』の昭和初期に刊行された巻号のごく一部について、ほぼ一年分について『年刊曲水俳句集』として再選発刊されているが、その『第一輯』（昭和五年十二月発行 第十五巻第一號）『第十一輯』（昭和五年十一月発行の『曲水』から選句編集）と『第四輯』（昭和九年三月発行 第十七巻十一號）『第十八巻第十號』（昭和七年十一月）『昭和八年十月発行の『曲水』から選句編集』も入手することができ、欠巻となつて巻号に掲載されていたと推定できる椿年の句を確認することができた。ただし、『曲水』についての椿年の句が掲載され始めるのは、第十四巻第十二號（昭和四年九月號）からであり、昭和四年四月に曲水同人である古見豆人が、椿年の母校でもあ

る駿東郡小山町成美尋常高等小学校長として着任し、そのすぐ後に『曲水』への投句が薦められ、それに従つて投句したものであることが推定できる。

次に、松本椿年・坂本緑村・早間冬青子たちが中心になつて運営していた富士紡績小山工場内の俳句部の『簞』も所在をまだ突き止めていない。昭和四年四月の古見豆人の母校への着任とともに、部外の俳人湯山素鷗・湯山逸素を加えてあゆみ句会を興し、俳句誌『大富士』として発展していくことになるが、その経緯は古見豆人が『曲水』第十六巻第六号（昭和六年六月号）に掲載した「大富士」という記事に詳しく記載されている。実際に豆人が育てた俳人の中に、『曲水』の作家として育つていった多くの俳人がいたのである。

昭和六年一月から刊行された月刊俳句誌『大富士』は、戦後の発刊分に限定されるが、国立国会図書館がマイクロフィッシュ化して閲覧の便宜に供されている。昭和六年一月号からの戦前分は、古見一夫（俳号豆人）編集の書籍『大富士句帖』第一輯）『第五輯』として刊行されている。『大富士句帖』第一輯）『第四輯』については、大変幸運なことに日本の古本屋サイトで検索したところ、二軒の古本屋が分割して所蔵していることがわかり、入手することができた。これから、戦前の『大富士』に掲載された椿年の主な句を確認することができる。これらの雑誌に掲載されている椿年俳句のデータベースを作成中であるが、まだ作成作業中というのが現状である。

### 松本椿年年譜（暫定版）の作成

さて、まだ不明の年譜記載事項が残されているが、現時点で作成



した暫定版を表一に示す。松本椿年（本名松本傳次郎）の年譜の内、明治期から昭和初期の履歴事項二つについて、直前まで不明であった。一つは、高等小学校を卒業しているかどうかといった学歴についてであった。明治二十年（一八八七）七月生まれの松本傳次郎世代の学校教育制度は、中野文庫の小学校令サイトによると、小学校令（明治二十三年勅令第二一五号）によることになる。当時小学校は四年間の尋常小学校と四年間の高等小学校があった。飛び級の制度もあったが、義務教育は尋常小学校の四年間のみであった。

それも無償化されていないので、貧しい家庭や地域では尋常小学校をきちんと卒業できない場合もあり、まして高等小学校まで進学卒業できるかどうかかわからないような時代であった。尋常高等小学校の卒業証書があれば明確であるが、それは現存していないと思われるので、それをどのように推定するかであった。それについては、椿年の次兄啓作について「椿年のすぐ上の兄は大変勉強のできた人で、小学校も飛び級をやった人で、東京の学校までやった。東京に出て行ったままなかなか家に帰ってこないで、父親が危篤という嘘の電報を打ち、戻ってきたところを養子に出した」といった松本本家の言い伝えがあり、そこから三男の傳次郎も高等小学校までは卒業したのではないかと推測した。その上で、二〇一五年八月に行った二回目の訪問調査の折に見つけた二つの資料から、八年間の尋常高等小学校の課程を修了し卒業しているという判断とした。その資料には、未公開資料三として示した、八十三歳（昭和四十四年（一九六九）九月と推定）の時に書いた、母校小山町立成美小学校への敬老の日の行事で児童に話の機会を与えていただいたことへの礼状下書きという趣旨の資料で、その中に「成美（小）へ数へ年六、七才で入学し八年間居て卒業しました」という記述がある。ま

た、同じ調査で発見し調査のために借用してきた現資料『つきき集』に、卒業の時に作ったと推定される句が二句あるのを見つけた。

卒業日机より出しかけら墨

卒業やあれし先祖の墓に立つ

一つ目の句は、学校に通って随分と勉強したものだ。ずっと使ってきた墨もこんなに小さくなったという感慨を詠んだものと理解できる。

二つ目の卒業の句は、無事に学校を卒業できたので、それを先祖に報告に行き、これからこの家を背負っていくといった意気込みを表す句と読める。これらを十歳の尋常小学校卒業時に詠んだとするのはやや無理があり、むしろ十四歳になっている高等小学校卒業時のものと推定する方が自然ではないだろうか。

次に「小学校卒業後、富士紡績小山工場に勤め、役付社員となったが、ある時意を決して富士紡を退社し、農一本の生活に転じられ小山町での乳牛飼育の先駆者となって、有畜農業経営に踏み切るようになった」と、『曲水』『大富士』同人佐野閑江が『句集 老雅』の「椿年句集の発刊によせて」の中で書いている。また、椿年の末娘の記憶によると、「富士紡績をやめたのは昭和七、八年頃」という証言があるので、富士紡績小山工場に勤めた時期と退職した時期を、これらの情報から年譜の履歴事項に記載する必要がある。この退職の時期を特定するために非常に重要な俳句が、『曲水』第十八巻第一号（昭和八年一月号）に掲載されている。

退職 冬近きそこら蟲鳴く別れかな

『曲水』第十八巻第一号 昭和八年一月号七一頁

俳句の月刊誌の締め切りは最短で刊行二か月前（曲水の場合、 $\times$ 切り毎月一日）が標準なので、この句は昭和七年十月下旬に投句されたと推定するのが合理的である。すると、富士紡績を退職した直後にこの句を投句したと考えると、退職したのは昭和七年十月と推定するのが無理がないだろう。また、『大富士句帖 第一輯』（九六頁）には同じ時期に作られた次の句が掲載されている。

秋雑 退社二十五年振りにて道路普請に参加

秋高く部落の人となりにつけり

この句の詞書きから約二十五年間富士紡績に勤務したということになるので、そこから逆算すると、入社したのは明治四十年（一九〇七）二十歳と推定できる。十四歳で高等小学校卒業後、富士紡績に入社するまでの数年間家の農業の手伝いに従事していたこととなる。ただし、当時の兵役制度から考えると（ウィキペディア徴兵令のサイトによると）、三年間の兵役義務があったが、十一歳の時同村の山崎伊三郎家の養子（嗣子）となることにより免除されたと推定できる。なお同家との養子縁組は二十三歳の時に解消し、松本に復姓している。当時の農民の知恵かもしれないものである。

なお、椿年が古見豆人の推薦で渡邊水巴主宰月刊俳誌『曲水』に投句を開始したのは、昭和四年九月の第十四巻第九号からである。

水巴選曲水句帖雑詠

豆の芽をなめつくしけりなめくじり

中島月笠選

餘花の家門扉音なく開きけり

巻末の誌友同人紹介欄に、豆人紹介俳人として記載

『曲水』第十四巻第九号 昭和四年九月号三七頁、七  
七頁、八八頁

俳人椿年にとって最も輝かしい年は、退職した翌年昭和八年（一九九三）である。この年の正月古見豆人と雪中富士登山を行った。<sup>3</sup>

この時の句が『曲水』第十八巻第四号（昭和八年四月号三四～三五頁）「曲水句帖」の竿頭を飾った。

雪中富士登山（五句）

笹鳴や休むとこなく雲に立つ

樹々透けて空の蒼さや櫓の音

吹雪く中に御慶かはわして消えにけり

石室や雪に光れる異人の瞳

大吹雪捲き來る中を日射しけり

戦前の俳句誌に投句した最期になるのは、昭和十五年（一九四〇）で、その前年昭和十四年（一九三九）十二月に松本家の甥紋地が戦死、翌年その遺骨と軍刀が帰還する。その時の南風の句。季語から考えると、昭和十五年五月頃の句と推定できる。

戦死せる甥の遺骨を迎えて（二句）

南風 南風や血曇り濃ゆき日本刀

抱く遺骨脈うてるかに南風をゆく

『大富士句帖 第四輯』一八頁

この句を最期に、俳誌『大富士』への投句休止。

この昭和十五年は京大俳句事件が起こった年で、俳句の世界にも思想弾圧と国家統制が厳しくなっていく年で、俳壇や俳句誌も大きく変貌していく年であった（森、二〇一三）。

椿年が再び、『大富士』に復帰するのは十三年後の昭和二十八年（一九五三）十一月のこととなった。

老後

まだ餅をつき得る力ありにけり

凶作の田面となし初日の出

『大富士』第二十四巻第二号 昭和二十九年二月  
号四頁、一二頁

また、昭和三十年（一九五五）五月には妻すみとの死別。その折の句だが、第一句は臨終の時の句。第二句は、亡くなった後、悲しみを抑えて、どこか無理をしている椿年の心情が彷彿とする。第三句は葬儀の折、長らく疎遠になっていた再会して程ない古見豆人師から、追悼句と線香を贈られたことへの感謝の気持ちが、盛り込まれた句であると推定される。

老妻没す 三句

うなづけど目はうつろなり南風に灯す

子の孫の泣くを制して南風に佇つ

師よりの悼句南風の線香つぎ足しぬ

『大富士』第二十五巻第七号 昭和三十年七月号六頁

しかし、その師との再会後の期間は短く、昭和三十三年（一九五八）十一月には古見豆人師との永遠の別れが訪れる。

昭和四十年（一九六四）九月には嗣子辰雄病死といった出来事が、七十八歳の椿年を襲った。まさに悲嘆、暗澹たる思いであったと思われる。

嗣子淋巴腺肉腫にて逝く

秋冷の耳寄せ聴くや吾子の声

慟哭を耐へ寄る白壁の冷

『みづうみ』第三百十二号 昭和四十一年一月号七頁)

『句集 老雅』の秋の部は、この句を含む「嗣子国立千葉病院に逝く 十五句」二一三～二一六頁)で寂寞とした余韻の中で秋を終えている。その最後の第十五句。

子は遠く虚空に秋の日は沈む

その後も、昭和四二年年末に起こった親族(姪のぶの娘の夫)の交通事故死。翌年一月には妻没後大きな心の支えでもあった菩提寺勝福寺住職の突然の遷化。昭和四十八年春には、同じ年で長年俳句を共にしてきた前田岳人が天寿を全うする。

『第二句集 限界』には「岳人逝く五句」という詞書きがついた五句が、春の部の終わりに置かれている。五句のうち最後の二句が、詞書きなしで、『みづうみ』第四〇二号に掲載されている。

次に逝くは吾かも春の雲仰ぐ

花冷えの土かけて永遠の別れかな

『みづうみ』第四百二号 昭和四十八年七月号二六、二七頁)

さらに晩年の昭和五十六年九月には、二十一歳年下の俳人石田仏子が天寿を全うするといった長寿者には避けられない出来事が訪れ

る。そして、昭和六十一年二月八日、春風の絶吟の句を残して天寿を全うする。行年百歳の俳人の静かな生涯の終焉であった。

以上が試作した松本椿年年譜の概略解説である。短期間に調べて構成した年譜としては、一応まとまったものと考えているが、まだ多くの不明の年譜記載事項、生涯の出来事が残されているので、今後修正あるいは追加事項も十分あるのではないかと考えている。



田園俳人松本椿年の生涯と作品(-)

表一 松本椿年（傳次郎）略年表

年号	年齢	出来事
明治二十年 (1887) 七月	誕生	静岡県駿東郡中嶋村の旧家の三男として誕生 父親松本勘太郎（俳号吉野庵禾恰 四十五歳母きく 四十一歳 義兄紋次郎（俳号竹因） 二十六歳、長姉まさ二十歳、 次姉くら十二歳、長兄半治十歳、次兄啓作三歳
明治二十四年 (1891) 十月	四歳	義兄松本紋次郎と長姉まさとに長女りん生まれるが、翌明治 二十五年（1892）一月早世
明治二十七年 (1894) 四月	六歳	静岡県駿東郡六合村立成美尋常高等小学校入学
明治三十一年 (1898) 三月 四月 九月	六〜七歳 頃 の冬 七歳	父禾恰の句会の折、最初の朝寒の句を口ずさみ喝采を受ける 朝寒く茶椀茶碗の水りいし 妹あき（勘太郎三女）誕生
明治三十二年 (1899) 八月	十歳	静岡県駿東郡六合村立成美尋常小学校卒業 父親より俳号椿年を与えられ、この頃から句作を始める 静岡県駿東郡六合村立成美高等小学校進学 妹あき早世
明治三十四年 (1901) 一月	十一歳	同村山崎伊三郎の養子となる
明治三十五年 (1902) 三月	十二歳	妹イワ（勘太郎四女）誕生
明治三十五年 (1902) 三月	十三歳	十歳年上の長兄半治室伏まつと婚姻届
明治三十五年 (1902) 三月	十四歳	静岡県駿東郡六合村立成美尋常高等小学校卒業
明治四十年 (1907)	二十歳	富士紡績小山工場勤務
明治四十一年 （1908）二月	二十一〜 二歳	三歳年上の次兄啓作小野家に婿養子
明治四十三年 (1910) 十月 十一月	二十三歳	山崎伊三郎との養子縁組解消、松本家に復縁 北郷村山崎利三郎次女すみと婚姻入籍 長女イマ誕生
大正二年 (1913) 七月	二十六歳	次女サク誕生

十一月	十一月	妹イワ没（行年十五歳）
大正五年 (1916) 一月	二十八歳	長兄半治妻まつ没（行年四十四歳）三男三女をなすがいず れも早世
大正六年 (1917) 九月	三十歳	母きく没（行年七十一歳老衰）
十一月	分家	長兄半治岩田やすと再婚 四男紋地をなす（十一月） 三女志磨誕生
大正九年 (1920) 二月	三十二歳	長兄半治妻やす没（行年二十八歳） 長兄半治りょうと再婚
大正十年 (1921) 五月	三十三歳	四女みどり誕生
大正十一年 (1922) 二月 四月 十二月	三十四歳 三十五歳	五女愛子誕生 長姉まさ没（行年五十七歳） 父勘太郎没（行年八十二歳） 富望主追悼句会天位
大正十二年 (1923) 十月	三十六歳	供物たた霊棚の灯の揺らくのみ この頃から俳句を作り始める 富士紡績小山工場内に俳句 部創部『舊』創刊
大正十四年 (1925) 三月	三十七歳	この頃、加納野梅門下坂本緑村帰村 富士紡績小山工場勤務 加納野梅坂本緑村宅訪問（昭和三年以前） 加納野梅主宰『鬼栗毛』投句
大正十五年 (1926) 六月	三十八歳	長兄半治妻りょう没
昭和二年 (1927) 二月	三十九歳	末子（六女）喜美子誕生
昭和四年 (1929) 一月 四月	四十一歳	加納野梅月刊俳誌『新草』創刊 坂本緑村と月刊俳誌『新草』に投句 古見豆人静岡県駿東郡小山町立成美高等小学校長に着任 古見豆人あゆみ吟社創設 年刊俳誌『あゆみ句帖』 部外の湯山素歐・湯山逸素も同人

昭和五年 (1930)	六月 九月	四十二歳 四十三歳	古見豆人の推薦で渡邊水巴主宰曲水月刊俳誌『曲水』に投句 『曲水』第十四巻第九号(昭和四年九月号) 水巴選曲水句帖 豆の芽をなめつくしけりなめくじり 雑詠 中島月笠選 餘花の家門扉音なく開きけり 『曲水』巻末の誌友同人紹介欄に、豆人紹介俳人として記載
昭和六年 (1931)	一月 十月頃	四十四歳	古見豆人大富士吟社創設 俳誌『大富士』創刊投句 草案新築 飾矢の鬼門差しある銀河かな(『曲水』第十七巻三号)
昭和七年 (1932)	十月	四十五歳	富士紡績退社 退職 冬近きそこら蟲鳴く別れかな (『曲水』第十八巻第一号(昭和八年一月号)) 秋雑 退社二十五年振りにて道路普請に参加 秋高く部落の人となりけり(『大富士句帖第一輯』)
昭和八年 (1933)	一月 四月	四十五歳	一月二日 古見豆人と雪中富士登山 雪中富士登山五句『曲水』第十八巻四号曲水句帖巻頭を飾る 吹雪く中に御慶かはわして消えにけり 末子静岡県駿東郡小山町立小山第一国民学校入学 木の芽 末子入学 広げたる本の句ひや子の芽晴 (『大富士句帖第一輯』) 石田仏子小山町に転居 大富士同人
昭和十年 (1935)	一月	四十六歳	この頃から『曲水』への投句休止
昭和十一年 (1936)	三月	四十七歳	次姉くら没(行年六十三歳) 納棺 がつくりと頭垂れたる寒さかな (『大富士句帖第二輯』六四頁)
昭和十二年 (1937)		四十八歳 四十九歳	日中戦争の勃発により甥紋地招集
昭和十三年 (1938)	三月 四月		古見一夫(豆人) 師小山第一国民学校長退職 古見一夫(豆人) 湘南学園(高座郡藤澤町鶴沼)に異動転居、後東京に転居

昭和十四年 (1939)	十二月	五十一歳	甥紋地戦死 末子喜美子松本家の養女とする
昭和十五年 (1940)	四月 五月	五十二歳	杉山辰雄を婿養子として、長女イマと婚姻届 甥紋地の遺骨と軍刀帰還 戦死せる甥の遺骨を迎えて(二句) 南風 南風や血曇り濃ゆき日本刀 抱く遺骨脈うてるかに南風をゆく (『大富士句帖第四輯』) この句を最期に、俳誌『大富士』投句休止 次女サク矢澤正春と婚姻
昭和十六年 (1941)	二月	五十二歳	
昭和十八年 (1943)	十一月	五十五歳	義兄紋次郎(俳号竹因)没(行年八十六歳)
昭和二十年 (1945)	二月	五十六歳	三女志磨瀬戸正と婚姻
昭和二十一年 (1946)	四月	五十七歳	四女みどり宮川孝策と婚姻
昭和二十二年 (1947)	四月	五十八歳	山崎栄、末子喜美子と婚姻、松本家の嗣子とする
昭和二十六年 (1951)	十一月	六十三歳	五女愛子坂本薫と婚姻(石田仏子夫妻が仲人)
昭和二十八年 (1953)	七月	六十五歳	七月一日足柄支部句会 足柄圓通寺 豆人と再会 (『大富士』第二十三巻第九号 昭和二十八年九月号 支部精進情報静岡岡県足柄支部報)
昭和三十一年 (1956)	十月	六十六歳	大富士小山足柄岡支部主催足柄峠吟行(十月一日 『大富士』第二十三巻第十二号 昭和二十八年十二月号) 句帖手に手に雨の花野に散らはれる 『大富士』への投句再開
昭和三十九年 (1964)	二月	六十六歳	『大富士』第二十四巻二号への投句掲載 老後 まだ餅をつき得る力ありにけり 凶作の田面ともなし初日の出

田園俳人松本椿年の生涯と作品(一)

五月		足柄峠豆人句碑除幕式記念句会（五月二十三日） 富士からの薫風句碑の座を巡る 椿年 〔大富士〕第二十四卷第七号
昭和三十年 （1955）五月	六十七歳	妻すみ逝去 行年六十九歳 老衰 老妻没す 三句 うなづけど目はうつるなり南風に灯す 子の孫の泣くを制して南風に佇つ 師よりの悼句南風の線香つぎ足しぬ 〔大富士〕第二十五卷第七号昭和三十年七月号
昭和三十三年 （1958）十一月	七十一歳	古見豆人師没（十一月二十二日花石路忌）
昭和三十九年 （1964）七月	七十七歳	喜寿の祝 七夕の笹影に居て喜寿の膳 〔句集 老雅〕 〔みづうみ〕第二百九十七号昭和三十九年十月号
昭和四十年 （1965）八月 九月	七十八歳	前田岳人『自選 岳人句集』出版 嗣子辰雄病死（行年五十九歳） 嗣子淋巴腺肉腫にて逝く 秋冷の耳寄せ聴くや吾子の声 〔みづうみ〕第三百十二号昭和四十一年一月号 嗣子国立千葉病院に逝く 十五句 〔句集 老雅〕 親族交通事故死
昭和四十二年 （1967）十二月	七十九歳	近親者事故死 七句 〔句集 老雅〕 会葬者揃う間庫裡のストープに 〔みづうみ〕第三百四十二号昭和四十三年七月号
昭和四十三年 （1968）一月	七十九歳	菩提寺勝福寺住職遷化 勝福寺住職突如入寂 七句 〔句集 老雅〕 寒々と幼き喪主の法衣かな
昭和四十五年 （1970）四月	八十一歳	〔句集 老雅〕出版
昭和四十八年 （1973）三〜四月	八十五歳	前田岳人没 行年八十七歳 次に逝くは吾かも春の雲仰ぐ 花冷えの土かけて永遠の別れかな 〔みづうみ〕第四百三十三号昭和四十八年七月号

昭和四十九年 （1974）四月	八十六歳	石田仏子 and 光市に転居 五月十九日中島公民館で送別句会
昭和五十六年 （1981）六月		勝福寺にて岩田柴人・小野虹人の追悼句会（六月十日）
昭和五十七年 （1982）四月	九十四歳	石田仏子没（九月十八日）行年七十四歳 〔第二句集 限界〕出版
昭和五十七年 （1982）八月	九十五歳	〔仏子句集 花筏〕出版
昭和六十一年 （1986）二月	九十八歳	行年百歳にて逝去 絶吟 春風に乗つてゆかばや句の行脚

謝辞

本研究は、松本椿年翁のご子孫である松本喜美子・松本典彦・時男の各氏による貴重な資料の提供と聞き取り調査が研究の基盤データとなっている。同じく、国立国会図書館・日本近代文学館の貴重な蔵書を利用していただいた。また、一部の資料の翻刻に際しては、相山女学園大学国際コミュニケーション学部に加藤益幹先生・太田有多子先生のご助言をいただいた。記して感謝の意を表します。

注

- (一) 昭和三年以前に加納野梅が、静岡県駿東郡小山町の坂本緑村の生家を訪れ宿泊した時の句。  
小山驛の緑村の家に宿る  
花火 山で聞く町のどよみの花火かな〔野梅句集〕一〇九頁  
緑村居所見（二句）  
稲 起き出でし眼に霊峰や稲の梅雨（同 一二三頁）  
(二) 第十六卷第三號（昭和六年三月號）、第二十二卷第一號・第三號・第五號・第六號（昭和十二年一月號・三月號・五月號・六月號）

(3) 古見豆人編の『大富士句帖 第一輯』新年の部に次のような豆人の句がある。『大富士』第一巻第一號〜第三巻第十二號 昭和六年一月〜昭和八年十二月の掲載句から選句掲載)

富士山二号目にて床次課長に言葉をかけらるる  
年賀 吹雪く中に富士山は日當る御慶かな

# 引用文献

雨宮虹月 昭和十二年(一九三七) 句集 みなわ 大富士叢書第一篇  
大富士吟社

石田仏子 昭和五十七年(一九八二) 仏子句集 花筏 私家版

古見豆人 昭和六年(一九三一) 大富士『曲水』第十六巻第六號、六〇〜六一頁

古見一夫(豆人)編 昭和九年(一九三四) 大富士句帖 第一輯 啓仁館 (昭和九年六月発行『大富士』第一巻第一號〜第三巻第十二號 昭和六年一月〜昭和八年十二月の掲載句から選句掲載)

古見一夫(豆人)編 昭和十二年(一九三七) 大富士句帖 第二輯

大富士吟社 (昭和十二年十一月発行『大富士』第四巻第一號〜第六巻第十二號 昭和九年一月〜昭和十一年十二月の掲載句から選句掲載)

古見一夫(豆人)編 昭和十五年(一九四〇) 大富士句帖 第三輯

大富士吟社 (昭和十五年八月発行『大富士』第七巻第一號〜第九巻第十二號 昭和十二年一月〜昭和十四年十二月の掲載句から選句掲載)

古見一夫(豆人)編 昭和十九年(一九四四) 大富士句帖 第四輯

大富士吟社 (昭和十九年十二月発行『大富士』第十巻第一號〜第十二巻第十二號 昭和十五年一月〜昭和十七年十二月の掲載句から選句掲載)

秦泰二編 一九九五 グランマ・モーゼスの贈りもの Grandma Moses

## 文藝春秋

原田八郎(濱人) 昭和三十八年(一九六三) 定本原田濱人句集 原田濱人句集刊行会

金子敏女 昭和四十九年(一九七四) 句集 波の音 私家版

加納亥太郎(野梅) 昭和三年(一九二八) 野梅句集 野梅吟社

加納野梅編 昭和七年(一九三二) 新草俳句集 野梅吟社 (昭和七年十二月発行『新草』創刊号〜昭和七年八月号より選句掲載)

前田弥一(岳人) 昭和四十年(一九六五) 自選 岳人句集 私家版

松本傳次郎(椿年) 昭和四十五年(一九七〇) 句集 老雅 私家版

松本傳次郎(椿年) 昭和五十七年(一九八二) 第二句集 限界 私家版

宮川充司 二〇〇〇 生涯発達と個人発達 宮川充司・大野 久・大野 木裕明編 子どもの発達と学校 ナカニシヤ出版 一〜一六頁

森武司 二〇一三 新興俳句運動と俳句弾圧事件 球俳句会

渡邊義(水巴)編 昭和六年(一九三一) 年刊曲水俳句集 第一輯

曲水社 (昭和五年十二月発行『曲水』第十五巻第一號〜第十一號 昭和五年一月〜昭和五年十一月 発行から選句編集)

渡邊義(水巴)編 昭和九年(一九三四) 年刊曲水俳句集 第四輯

曲水社 (昭和九年三月発行『曲水』第十七巻十一號〜第十八巻第十號 昭和七年十一月〜昭和八年十月発行から選句編集)

## 未公開資料

一、畊石選 富望ぬし追悼句集(推定年代大正十二年秋の追悼句集、選者畊石は、指頭堂という雅印から、大正から昭和初期にかけての俳人で篆刻家の服部畊石と判断できる)(椿年遺品)

二、松本椿年 つはき句集(昭和三十年代初頭までの自選句集と推定二百八十句が季節別に選句されているが、冬の句が少ないのが特徴の自筆遺品)

三、松本傳次郎(椿年) 小山町立成美小学校敬老の日行事への礼状下



書き（八十三歳と文中に書かれているので、昭和四十四年（一九六九）九月の礼状の下書きと推定）

引用サイト

中野文庫サイト 小学校令 <http://www.geocities.jp/nakanokib/rei/m23-215.htm>

ウィキペディア 徴兵令 <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B5%B4%E5%85%B5%E4%BB%A4#.E5.BE.B4.E5.85.B5.E4.BB.A4>

\* 教育学部 子ども発達学科